同情できない「私」のかたち

ベケット作品における蠕虫のイメージ

清水　さやか

はじめに —— Worm の意味

「そろそろ名前をつけてやらなきゃならない、ひとりぼっちのあいつに。自分の名前がなきゃ、救いはない。だからあいつをワームと呼ぼう[1]」—— サミュエル・ベケットの小説『名づけえぬもの』（1953 年）には、「虫 *worm*」を意味する名で呼ばれるものが登場する[2]。登場するといっても、ワームは語り手の意識の中でのみ感知される存在であり、ワームという名も語り手が仮に与えた呼び名にすぎない。それでも作品中盤以降、語り手は並々ならぬ思い入れを見せながらこのワームについて語るようになる。終始実体のよくわからない存在として、つまり明瞭なイメージを持たない存在として語られ続けるワームだが、その特異な名前に一定以上の喚起力があることは否定できない。語り手がワームの話を始める前に想像していた人物が、マフード Mahood という、明らかに「人間 *manhood*」を想起させる名を持つ人物であることを考えると、「アンチ・マフード」として生み出された経緯を持つワームは自ずと人間的でないもの、すなわち、名前の通り下等な虫のようなイメージを暗に含むことになる。

同作に先立つ『マロウンは死ぬ』（1951 年）では、語り手は「自分の代理人」として創り出す架空の登場人物に、意識的に人間らしい属性や容貌を授けようとしていた。このときの記憶を引きずる『名づけえぬもの』の語り手は、自らの過去の振る舞いについて、「どうして私は人間たちのなかに、光のなかに、自分の代理を置こうとした？（*I*, p. 17-18）」と批判的に振り返る。

---

[1] Samuel Beckett, *L'Innommable*, Éditions de Minuit, 1953, p. 85. なおこれ以後、本論では同書より引用する場合は *I* という略号を用い、本文中に頁数を記載する。

[2] 本論は、東京大学大学院人文社会系研究科に提出した博士論文「共に苦しむ「私」たち —— 中期サミュエル・ベケット作品における受苦と共苦の諸相」（2021 年 9 月 7 日提出）の第 7 章の議論を大幅に修正・加筆したものである。また本研究は、「20 世紀中期の『蠕虫』をめぐる文学的想像力についての比較研究：乱歩からベケットまで」という研究テーマで、野村財団野村学芸財団による「奨学研究一時金」（2017 年 3 月）、サントリー文化財団「若手研究者のためのチャレンジ研究助成」（2017 年 4 月－2018 年 3 月）の助成を受けている。

そしてこの反省に基づき、今度は新たに「精神を欠く純粋な物質、その精神は烙印のごとく荒々しく焼き付けられたにすぎない純粋な物質[3]」といえるワームを、自らの代理人の地位に据え置こうとするのである。ここに観察できるのは、語り手における自己探求の方法の変化である。従来の作品の語り手は、あえて人間らしい見かけを持つ登場人物を「私」の代理とすることで両者の不一致を暴露し、「私」の主体としての非同一性を徐々に白日の下に晒すという方法をとってきた。しかし『名づけえぬもの』の語り手は、完膚なきまでに人間性が剥奪されたもの、あるいははじめから明らかに非人間的なものに「私」を仮託することを選んでいる。つまり語り手は本作において、より直接的な形で、「私」という存在の非人間性に光を当てようとしているのだ。

バタイユが早くから喝破していたように、ベケット作品は『名づけえぬもの』以前から「人間における非人間性」（ジャン＝ミシェル・ラバテ）を描き出すことに心血を注いできた[4]。『モロイ』（1951 年）の主人公について「この人間、いやむしろ、自らの言葉によって支えられ、ひとりの人間になりえていたであろうこの存在」と語るバタイユは[5]、ベケット作品の主人公から人間性が消失しても、一種の動物性が清算されずに残り続けることに興味を示している。「もう歩けないとなると［モロイ］は這ってでもこのなめくじの旅を続けようとするだろう（傍点引用者）[6]」。まるでなめくじのようなモロイの身体は、四肢や器官が落ちたチューブを思わせるワームの身体イメージ —— 「もう胴体しか残っていない（*I*, p. 67）」 —— に継承されるわけだが、ここでひとつ素朴な問いを立ててみたい。ベケットはなぜ『名づけえぬもの』において、非人間性を体現するものに「ワーム」という名を与えたのだろうか。仮の呼び名に過ぎないとはいえ、この名によって、多かれ少なかれ蠕虫のイメージが重ねられることは避けられなくなる。ベケット史上かつてないほど正面から非人間的なものに対峙した『名づけえぬもの』において、非人間的なものを集約する名として、他の生物でなく蠕虫を意味する語が選ばれたことにはいかなる意味があるといえるのか。

---

[3] Anthony Uhlmann, *Beckett and Poststructuralism*, Cambridge / New York, Cambridge University Press, 1999, p. 176.

[4] Jean-Michel Rabaté, *Think, Pig!: Beckett at the Limit of the Human*, New York, Fordham University Press, 2016, p. 15.

[5] Georges Bataille, « Le silence de Molloy », in *Œuvres complètes*, Gallimard, t. XII, 1970-1988, p. 86.

[6] *Ibid.*, p. 91.

近年、動物論への関心の高まりのなかで、ベケット研究においても人間性や動物性をめぐる議論がいっそう注目されてきている。その結晶である各国の研究者による論集『ベケットと動物たち』は、ベケットにおける動物性の問題を考えるための新たな重要な指標となった[7]。同書のなかで、たとえば前述したラバテは豚、スティーヴン・コナーは蠅（主に成虫）のイメージに注目することでベケットにおける人間性の問題に肉薄している。しかしベケット作品には豚や成虫の蠅だけでなく、よりおぞましい印象を与える生き物、つまり節がなく、より原生的で、とはいえ卵のように完結した形象でもない、むきだしのまま不快に蠢き続ける蠕虫のイメージが、暗黙のうちに、しかし確実に重要な役割を担うものとして登場していることにも注目すべきだろう。

これまで、ベケット作品における蠕虫のイメージが全く研究者の関心を集めてこなかったわけではない。最新の研究に、ベケットにおける未成熟性という主題に着目した杉本文四郎の研究が挙げられる。杉本は「幼生」という概念を鍵に『事の次第』における動物、虫、原生生物のイメージについて詳細な分析を行い、未成熟性を体現するものとしてベケット作品における蠕虫を解釈する妥当性を十分に示した[8]。しかし蠕虫には、後で詳しく見てゆくように、西洋文化圏において何よりも「おぞましいもの」「吐き気を催すもの」「非人間的なもの」の代表例とみなされてきた歴史がある。この歴史を十分に参照しないことには、少なくとも『名づけえぬもの』において、非人間的なものがワームと呼ばれる理由やその意義を十分に説明することは難しいのではないか。

本論は蠕虫が伝統的に背負わされてきた否定的な役割にこそ、ベケットにおける蠕虫のイメージを読み解く鍵があると仮定し、まずは西洋文化圏における蠕虫の表象史のなかにベケット作品を位置づけることを試みる。具体的には、蠕虫が人間と非人間、あるいは「私」と「私でないもの」の峻別に関わる象徴的なモチーフであったことを明らかにしたうえで、それを足掛かりに『名づけえぬもの』における蠕虫のイメージを分析してゆくことになるだろう。この分析によって解き明かされるのは、蠕虫のイメージと、「私」と「私でないもの」を峻別する機能を持つ言語との密接な結びつきである。本論の最後では、蠕虫が提起する同情という問題に議論を展開させることで、

---

[7] Mary Bryden (ed.), *Beckett and Animals*, New York, Cambridge University Press, 2013.

[8] 杉本文四郎『サミュエル・ベケットと未成熟性の問題』（博士論文、東京大学総合文化研究科、2021 年 6 月 24 日学位授与）、とりわけ第 4 章「幼生の語り、『幼生の主体』 ―― 『事の次第』と未成熟性の問題」を参照のこと。

ベケット作品における蠕虫と言語の関係を掘り下げてゆきたい。

なお、フランス語の ver, vermine, larve 等に相当する英語の *worm* は、芋虫、蛆虫、ミミズ、回虫など多くの種類を含む、蠕動によって移動する細長くて脚のない小さな虫の総称である。本論ではこの *worm* について論じるが、その際この語が総称的な意味を持つ点を考慮して主に「蠕虫」という訳語を当てる。とはいえ *worm* の語義は多岐にわたり、たとえば *Oxford English Dictionary* によれば、蠕虫のなかでも蛆のような害虫・寄生虫のことを特に指す用法、あるいは伝統的に墓所で屍体を蝕むと考えられていた蛆虫やミミズのことを指す用法、また人に対する侮蔑表現として用いられる用法などがある。つまり「蠕虫」という中立的な総称では意味を的確に掬い取れないこともあるため、適宜「蛆虫[9]」や「寄生虫」や「虫」という訳語も織り交ぜて用いることとしたい。

1. 人間的ではないものとしての蠕虫

蠕虫をめぐるイメージの伝統

すでに触れたように、キリスト教文化圏において蠕虫は古来、概ね否定的な意味付けを持つものとみなされてきた。ジャック・ヴォワズネの詳細な研究が明らかにしたように、聖書やキリスト教関連の書物は、蛆虫を崩壊、堕落、肉体の腐敗、富などの現世の事物の虚しさ、死、罪の概念などと結びつけて提示している[10]。またコナーは、かつて何世紀にもわたって人間が蛆虫に頭蓋や脳を侵されるという恐怖に取り憑かれていた点に注目し、そのうえで、16、17 世紀には蛆虫という単語が「一度精神に巣食いはじめたら容易には取り除けないような思いつきや偏執的な空想[11]」を意味するようになったことを指摘する。現代語の *worm* に苦痛や悔恨の種という意味が残っている

---

[9] 蠕虫というわけではないが、ベケットが 1930 年代に書いた詩のなかには蠅が登場する “Serena I” と « La Mouche » がある。これらの詩にみられる蠅のイメージについては、Steven Connor, “Making Flies Mean Something”, in *Beckett and Animals*, *op. cit.*, p. 140-141 が参考になる。

[10] Jacques Voisenet, *Bêtes et Hommes dans le monde médiéval. Le bestiaire des clercs du Ve au XIIe siècle*, Turnhout, Brepols, 2000, p. 103. たとえば「ヨブ記」に登場する蛆虫は、肉体の腐敗と生の儚さや、悪しき淫欲の悦楽を表すものにほかならないし、「イザヤ書」では「蛆がお前の下に寝床となり／虫がお前を覆う」（14 章 11 節）という文言でバビロンの恐ろしき滅亡が予言される。なお、本論における聖書からの引用はすべて『聖書　新共同訳』（日本聖書協会、1987 年）による。

[11] Connor, art. cit., p. 149-150.

ことからも、蠕虫・蛆虫をめぐる否定的価値づけの伝統をうかがい知ることができるだろう。

もちろん、歴史上、蠕虫に肯定的な意味が与えられた例がないわけではない。コナーも指摘するように、アリストテレスは『動物誌』等の著作で一部の虫や生物を生殖による命のサイクルから除外し、物質から自然発生しうるものと位置づけている[12]。虫の自然発生というこの幻想は、近代以前の聖職者たちにとっては、処女懐胎によって誕生したキリストの奇跡の一つの根拠となりうるものだった[13]。この架空の共通点から、蠕虫のなかに救世主の姿を見る、という特異な考えが生まれることになる。人々は幼虫という状態を「準備のための必要な段階、死と生の間の移行段階」と捉えたうえで、蠕虫を、単に救いのない転落や堕落を意味するだけでなく、たとえ地上では立場が下落してもいずれ天国では讃えられる、というキリストの未来の救済をも包含するモチーフとみなした。このような考えは、ヴォワズネによれば中世にはかなり広く浸透していたという。

しかしながら、やはり巨視的に見れば、蠕虫の肯定的な意味付けは限定されたものだったと言わざるを得ない。その証拠に、古来人間を蛆虫になぞらえる言説 —— あるいは人間と蛆虫を être 動詞で結びつける言説 —— は、悲嘆、非難、侮蔑、嘲笑、憐憫、侮辱など、否定的な意図のもとに発されることが圧倒的に多数だった。たとえば絶望したヨブが「まして人間は蛆虫／人の子は虫けらにすぎない[14]」と言うとき、蛆虫と結びつけられることで強調されるのは人間の無能さや無力さである。*Oxford English Dictionary* が *worm* の項に「侮蔑や嘲笑や哀れみの対象としての、またおぞましく惨めな生き物としての蠕虫に結びつけられた人間のこと」という語義を挙げているのもその裏付けとなる[15]。このような着想の背景にあるのは、精神ないし高度な知性を持った人間に比べれば、それらを持たない動物など卑小で取るに足りない存在にすぎない、という人間中心主義的な価値観である。「創世記」で神に地上を統べる権限を与えられた特別な存在である人間と、動物どころか「動物と非動物の境界[16]」にすらあると認識されてきた小さな虫。両者を同等の

---

[12] *Ibid.*, p. 139-140.

[13] Voisenet, *op. cit*, p. 106.

[14] 「ヨブ記」25 章 6 節。

[15] この点についてはコナーも —— 虫というよりも蠅に限った言及であるが —— 人と蠅が同一視される長い伝統があったことを指摘している。Connor, art. cit., p. 140.

[16] 蠕虫についてではなく蠅についての言葉となるが、コナーは「蠅は人間と動物というよりも、動物と非動物の間の境界線の目印となり、またその境界をつくってきた」ことを指摘する。Connor, art. cit., p. 139.

価値を持つ存在とは見なせないという認識が土台にあるからこそ、「A は蛆虫である」という表現は、それが向けられる者の、人間としての価値や能力を貶めるために用いられる暗喩となりえてきたのである。

19 世紀になると、それまで文学・芸術の分野で二次的な役割を与えられることが常であった蛆虫は、詩人たちの想像力を掻き立てる対象へと昇華される。しかしこの時期の文学・芸術にも、蛆虫をめぐる伝統的な認識、すなわち蛆虫は人間の同類ではないという認識が息づいていることは興味深い。ポーの「征服者蛆虫」やボードレールの「腐屍」のような蛆虫を大きく取り上げた詩はいずれも、生を蝕む死の側に属するものとして蛆虫を捉え、おぞましく醜悪なイメージで描き出すことで、最終的にそこに吐き気や恐怖という強烈な感覚、倒錯的な美、詩的強度を見出すに至っている。これらの詩では、蛆虫をはじめとする蠕虫は人間や動物に集合的に襲いかかる異質な征服者として描かれる。つまり身体に纏わりつき、肉の内部から生を蝕む蛆虫は、生ける人間とは異なる彼岸の存在とみなされる。なるほど「腐屍」の詩人は、蛆のたかる獣の腐屍をともに目撃した恋人に対して、彼女もいずれはこの醜い死体と「同類 semblable」になることを予告する。

> —— しかし、あなたもこの汚物の、
> この悪臭を放つおぞましきものの同類となるだろう、
> わが眼の星であり、わが自然の太陽である、
> 私の天使、私の情熱なるあなたも！[17]

しかし単純未来形の être 動詞が示すように、彼女が蛆虫のたかる腐肉の同類となるのはあくまで死後であり、まだ生きている「今」ではない。ボードレールのこの詩において蛆虫はメメント・モリのモチーフ、あるいはおぞましさという強烈な感覚を喚起するものではあるが、生者にとって理解可能、あるいは共感可能な同類とはやはり描かれておらず、人間ないし「私」と蛆虫の間にはあくまで同類ではないという埋めがたい溝がある。「詩編」に記された印象的な言葉 —— 「わたしは虫けら、とても人とはいえない。／人間の屑、民の恥[18]」 —— が端的に示すように、虫という表現が主に「人間的なもの」と「人間的でないもの」を峻別するために使用されてきたのは示唆的だ。虫であるという言説はすなわち、「とても人とはいえない」という意

[17] Charles Baudelaire, « Une charogne », *Les Fleurs du Mal*, in *Œuvres complètes*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », t. I, 1975, p. 32.
[18] 「詩編」22 章 7 節。

味を包含するものであることを、様々な時代のテクストは物語っているのである。

人の同類になった蠕虫 ── カフカとベケットの場合

上記のような虫と人間の分断を思えば、自分自身の内部の分節化不可能なものに蛆虫の名を与えるという『名づけえぬもの』の着想は革新的だったといえる。もちろんベケットの前には、人間の主体を虫に変身させた偉大なる先駆者、カフカがいる[19]。『変身』ではついに、虫は人間の対岸にいる下等で不潔な他者ではなく、また崩壊や堕落のような特定の概念をわかり易く象徴するものでもなく、ひとりの人間の身体そのものとなった。甲羅のような背中、痒みをもよおす腹部の白い斑点、先端から粘液を出す細い脚、腐りかけの残飯を好む食性 ── 自らのあるまじき変貌に戸惑いつつも、ザムザは虫の身体を自分自身のものとして受け入れざるをえない。文学において、虫なる「私」が誕生した瞬間である。

人間を虫に変身させるという想像力が誕生した背景に、19 世紀以降自然科学の発展に伴い、動物たちの生態が従来以上に明らかになりつつあったという歴史的な流れがあることは押さえておきたい。特に虫が人間にとって身近な生物になったことに限定して言えば、ジャン＝アンリ・ファーブルの功績は大きい。ファーブルは 1879－1907 年に刊行された『昆虫記』において昆虫を擬人的に描き、その生態を魅力的に物語化した。動物と非動物の境界線にあるとすら考えられてきた小さな虫も、ファーブルの手にかかると理解可能な、可愛くて親しみ易い存在となる。ファーブルによるこの虫の擬人化の手法、あるは人間の領域への虫の接近が、カフカやベケットのテクストにみられる、虫なる「私」という文学的想像力が生まれる水脈の一端となっていることは否定すべくもない。しかしカフカやベケットの着想が生まれる土壌としてそれ以上に重要と思われるのが、20 世紀初頭の文学・芸術に観察できる、生物それ自体に語らせる、という手法である。

20 世紀初頭から前半の哲学や芸術にしばしばみられる、「動物のようにと

---

[19] 自己を虫になぞらえる前史として、ここでは『ソクラテスの弁明』を取り上げたい。死罪を受けたこの哲学者はアテナイを馬にたとえたうえで、その馬を目覚めさせる虻に自らをなぞらえる。「大きくて血統はよいが、その大きさゆえにちょっとノロマで、アブのような存在に目を覚まさせてもらう必要がある馬、そんなこのポリスに、神は私をくっ付けられたのだと思うのです（プラトン『ソクラテスの弁明』納富信留訳、光文社古典新訳文庫、2012 年、65 頁）」。自己を虫にたとえる例のひとつであるが、虫への身体的な変身を描いたという点でカフカは文学における虫の表象を刷新したといえるだろう。

いうのでも、動物を模倣してというのでもなく、動物として」語るという手法を分析するために、マーゴット・ノリスは「生物中心主義」という概念を導入した[20]。ノリスは、この時期に人間中心主義への反発がとりわけ強まり、それを転覆させんとする考え方が芸術や哲学において顕著になったこと、またその結果として生物や無意識、本能や肉体そのものに語らせるという芸術的手法が花開いたことを的確に指摘している[21]。たしかに科学とテクノロジーが発展し、都市文化が進展して資本主義が成長するいっぽう、人間の欲望が肥大化し世界大戦が勃発する 20 世紀前半は、人間性への信頼がこれまで以上に大きく揺るがされた時代でもある。少なからぬモダニズムの作家は人間の意志や認識に対して批判や嫌悪の目を向け、人間中心主義的視点からの脱却を図った。ノリスはとりわけ、人間を自然の一部と捉え戻したダーウィンとニーチェの影響に注目しながら、カフカ、エルンスト、D・H・ロレンスらの作品に見られる生物中心主義を分析しているが、モダニストの直系にあたるベケットもまた、田尻芳樹の指摘するようにこの系譜に据えることができるはずだ。なぜなら、「少しの間でもいいから、うっすらとでもいいから、最初の原生生物から直近の人類に至る巨大な生命の竜巻のなかでもがきたかったという欲望（*I*, p. 59）」を告白したうえでワームという存在を提示する『名づけえぬもの』の語り手には、たしかに人間中心主義への批判意識や「人間の認識に「汚染」される必要がない存在形態[22]」への願望がみとめられるからである。

ワームは人間特有の能力をことごとく持ち合わせない存在として召喚されるが、彼の非人間性はとりわけその言語能力の欠如に顕れている。「でもワームは何も書き留められない（*I*, p. 88）」や、「私はワームのように声もなく理性もない（*I*, p. 101）」といった記述から読み取れる言語能力の欠如が示唆するのは、ワームが言語システム参入以前の存在、つまり一人称の声すらも発生する前の「前意識的存在[23]」であるということである。語り手の「私」がワームについて語り始めるよりも前、「彼らの人間性によって窒息させられているものを呟くために、地下牢に投げ込まれ、拘束され、隠され、拷問されている、人間のか細い声（*I*, p. 65）」が聞こえると語るのは重要である。この人間性によって抑圧され、排除されて棄却されるものが、やがてワーム

---

[20] Margot Norris, *Beasts of the Modern Imagination. Darwin, Nietzsche, Kafka, Ernst, and Lawrence*, Baltimore, Johns Hopkins University Press, 1985, p. 1.
[21] *Ibid.*, p. 5.
[22] Yoshiki Tajiri, “Beckett, Coetzee and Animals”, in *Beckett and Animals*, *op. cit.*, p. 30.
[23] Uhlmann, *op. cit.*, p. 176.

の非言語的な呻き声やざわめき声となってテクストに立ち現れることになる。対馬美千子は、「アンチ・マフード」としてのワームが物語＝歴史に回収されなかった点で、マフード以前の代理人と異なることに注目した。対馬によれば、「彼ら」の目的は、単に「名づけえぬもの」を光の領域（同作では人間や生の領域を意味する）に導き入れることのみならず、それと同時に反物語＝反歴史的存在であるワームを「名づけえぬもの」に忘却させること、つまり、ワームを「殺害」することにある[24]。しかし対馬も言うように、この「殺害」は失敗に終わる。なぜならワームへの直接的言及が消えてからも、その存在は「ざわめき」となって最後まで「名づけえぬもの」につきまとい続けるからだ。「名づけえぬもの」は「彼ら」の望むように光の領域に参入することなく、その手前の領域に留まり、反物語＝反歴史的な不毛な語り、あるいはざわめきを口から垂れ流し続けるほかない。

『名づけえぬもの』におけるこの「殺害」の失敗を、『変身』で害虫に変身したグレゴール・ザムザが最終的に人間たちに排除されることと比較してみると興味深いだろう。『変身』ではグレゴールの妹のグレーテが、虫に変身した兄を疎んじてこのように言う。

> 私、こんな怪獣みたいなものの前で、兄さんだなんて口にしたくないから、こんな言い方をするしかないんだけど、私たち、これをお払い箱にすることを考えるべきなのよ。これの世話をして、我慢を重ね、私たち、人間としてできる限りのことはやってきたし、誰からもこれっぽっちも、後ろ指をさされることはないわ、私、そう思っているわよ[25]。

グレーテははっきりと、この虫の排除こそが今や「私たち」（人間たち）の意向であることを言葉にしている。そしてこれを耳にしたグレゴールは、人間たちの望みに応えるかのように静かに息を引き取る。厄介な害虫の間接的な「殺害」に成功した一家が、晴れやかな一日を迎えたところで物語は幕を閉じる。かくして『変身』には、人間の非人間化と、その非人間的なものを排除することによって得られる「私たち」（人間たち）の共同体の安定化が、皮肉な形で描かれているのだ。これに対し、『名づけえぬもの』が力点を置

---

[24] Michiko Tsushima, “The Appearance of the Human at the Limit of Representation: Beckett and Pain in the Experience of Language”, in *Samuel Beckett and Pain*, edited by Mariko Hori Tanaka, Yoshiki Tajiri and Michiko Tsushima, Amsterdam / New York, Rodopi, 2012, p. 217-235.

[25] フランツ・カフカ『変身・断食芸人』山下肇・山下萬里訳、岩波文庫、1958 年、改版 2004 年、93－94 頁。引用にあたって一部の表記を改めた。

くのは、非人間的なものが「私」に取り憑き続けるという状況である。非人間的なものの排除の欲望が示されているという点で両者は共通しながらも、ベケットのテクストではワームの排除による「私たち」の安定化は実現しないのであり、その意味においては、ワームは『変身』の虫よりも、人間ないし人間性にとって一層有害で危険なものとして提示されている。

『変身』の虫と『名づけえぬもの』の虫のイメージは、その形状においても違いがみとめられる。「獣以下（*I*, p. 119）」という言葉が示すように、ワームに与えられるのは、四肢も関節もなく、あるいは主立った感覚器官もないまま地を這う下等生物 —— 原生動物、そして蠕虫 —— のイメージである。四肢、関節、腹、背など、明確な身体器官を有する『変身』の虫と比べると、ベケットが採用した蠢く盲目のチューブのような虫は、生物としてさらに退化した、あるいは未分化になったかのような印象を与える。なぜベケットの描く虫のイメージは、このように未分化なものでなければならなかったのだろうか。この点については、ベケットにおいて人間に進化する前の生物の存在形態に対する関心が、「私」自身の認識や意識が成立する以前の状態、つまり、生誕以前の状態への回帰願望と表裏一体の関係にあることを確認する必要がある。ベケットはしばしば、生まれないまま母の胎内で腐りゆく「老いた胎児[26]」のイメージを作品に登場させるが、器官のない虫の形状は、この強迫的なイメージと結びついている。つまり、未分化の塊のような蠕虫の身体イメージは、胎児の未分化性と屍体の解体する性質を同時に備えているからこそベケットにとって重要なのである。人類から虫に至る種の退化は、ベケット作品のなかで「私」という存在の前主体的・前言語的段階への回帰と軌を一にしている。生と死の中間地帯として位置づけられる「灰色」の空間で強制的に喋らされることに苦しみながら、『名づけえぬもの』の語り手はワームが体現する前意識的・前言語的領域への憧憬をちらつかせるのだ。

ただしベケットが、このような種の逆行のイメージを描きながらも、決して非言語の領域への回帰を称揚したわけではないことには留意する必要がある。ノリスが分析した D・H・ロレンスのような代表的モダニズム作家らが非人間の領域への憧憬に浸ったのに対し、ベケットは「三部作、とりわけ『名づけえぬもの』において、嫌らしい意識に向き合い、それを粘り強く探求すること選んだ」という田尻の指摘は的確だ[27]。前意識的・前言語的領域を体

[26] Beckett, *Malone meurt*, Éditions de Minuit, 1951, p. 84.
[27] Tajiri, art. cit., p. 31.

現する未分化な虫のイメージを描いてもなお、ベケットが関心を寄せるのはどこまでも喋り続ける内的な声であり、決して逃れられないコギトである。ベケットは人間以前の存在、あるいは非人間的存在への憧憬を示しつつも、その方向に舵を切ることなく、人間の特性としての意識や認識を、それが成立する間際のところで探求し続けたといえるだろう。

2. 「私でないもの」としての蠕虫

前節で確認したように、蠕虫が人間にとっての異物と見なされてきた伝統は、19 世紀以前のテクストを紐解けば容易に見出すことができる。それは転じて、虫という表現が特定の民族や人種、その他の社会集団を侮辱したり攻撃したりするための、今で言うヘイトスピーチの常套表現となり続けてきた理由を説明することになる。この節では、「A は蛆虫である」という中傷表現についてもう少し掘り下げ、その分析を起点としながら、『名づけえぬもの』の蠕虫のイメージが持つ誘惑の力について論じてゆく。

「A は蛆虫である」

ルターが『ユダヤ人と彼らの嘘について』でユダヤ人を蛆虫と名指して攻撃したように、反ユダヤ主義において蛆虫や寄生虫という語を用いた中傷が頻繁に用いられてきたことは比較的よく知られている。20 世紀前半も例にもれず、反ユダヤ主義の高まりやナチの台頭に伴い、この種の言説が多く流布された。たとえば『わが闘争』において人種と血の純粋な保存の失敗をあらゆる社会や文化の堕落の原因とみなすヒトラーは、ユダヤ人を「つねに他民族の体内に住む寄生虫に過ぎない[28]」と攻撃し、「血にうえた[29]」ユダヤ人が「非ユダヤ民族の奴隷化と、したがって絶滅をもくろむ[30]」がために意図的に混血を進めていると主張する。20 世紀の反ユダヤ主義者によって蛆虫や寄生虫の比喩が盛んに使われたのは、先述したように自然科学が発展し進化論や種の概念が広まった時代的背景と無関係ではないだろう[31]。パンフレ作家

---

[28] アドルフ・ヒトラー『わが闘争（上）―― I 民族主義的世界観』平野一郎・将積茂訳、角川文庫、1973 年、改版 2001 年、396 頁。強調は原書。

[29] 同書、425 頁。

[30] 同書、417 頁。

[31] 蠕虫・蛆虫という概念からややはみ出すが、政治的言説における寄生虫（parasite）の比喩の歴史については以下の論文（特に p. 220-226）に詳しい。parasite という語が生物学的な意味を持つようになったのは 18 世紀以降であり、その生物学的な意味が擬人的に政敵に用いられるようになったのが 18 世紀末以降、さらに発展してとりわけ民

としてのセリーヌもまた、侮蔑語としての「蛆虫」を用いた一人だった。

> 気をつけ！　……もしユダヤ人全員を追い返すことができたら、
> フリーメイソンの親玉と一緒にパレスチナに送り返せたら ―― なぜなら
> 奴らは愛し合ってるんだから ――
> ［…］
> そうしたらわれわれの子供たちはもう
> 懇願したりせがんだりしに行かなくてすむだろうに
> ユダヤ人……フリーメイソンの奴ら……貪欲な条虫の元に……
> 蛆虫ども、公の肉についた「ミミズのごとき徴税人」に……[32]

『虫けらどもをひねりつぶせ』のこの部分で、セリーヌは同時代のフランスを腐肉に見立てたうえで、ユダヤ人らをその肉に群がる蠕虫と条虫に例えている。ここで呪詛の対象となっているのは、フリーメイソンが含まれていることからうかがえるように、ユダヤという人種や民族そのものではない。しかし、ある社会的集団に対する攻撃になっているという意味では、蛆虫の比喩の伝統を踏襲するものである。この引用箇所では「もしすべてのユダヤ人を追い返すことができたら」という反実仮想がなされている。パンフレ作家としてのセリーヌが取り憑かれているように見えるのは、「彼ら」なるユダヤ人や他の人種、フリーメイソンといった有害な集団が「私たち」の内部に潜り込み、「私たち」を内側から食い荒らして滅ぼしてしまうという妄想である。他なるものとしての「彼ら」が「私たち」の同一性を崩壊させ、「私たち」になり代わるという恐怖が、蛆虫や寄生虫のみならずあらゆる害獣の暗喩をセリーヌのテクストのなかに呼び寄せる。当然ながらその妄想に囚われた主が心血を注ぐのは、この寄生虫をいかに徹底的に「私たち」から駆除するかという点である。

吐き気を催させる蠕虫

ここで想起したいのは、少なくとも西洋文化圏において、蠕虫が人間に吐き気を催させる代表的事物であるとみなされてきたという点である。ヴィンフリート・メニングハウスがアウレル・コルナイの論に依拠しながら言及す

族や人種で定義された集団を標的にする比喩になったのが 19 世紀以降であること、またこの語における非難の意味が発展した背景には生物学（の発展）があることなどが指摘されている。Andreas Musolff, “Metaphorical *parasites* and ‘parasitic’ metaphors: Semantic exchanges between political and scientific vocabularies”, in *Journal of Language and Politics*, vol. 13, no. 2, 2014, p. 218-233. [en ligne ; DOI : 10.1075/jlp.13.2.02mus]

[32] Louis-Ferdinand Céline, *Bagatelles pour un massacre*, Denoël, 1937, p. 299.

るように、柔らかく不定形で、ときに粘着性の身体をうようよと蠢かせながら群れなす蛆虫は[33]、腐敗した悪臭漂う死骸（あるいはそれが意味する死）を想起させるだけでなく、逆にその多産性や生命力から生の過剰さの印ともなりうる。醜い死の光景は自分自身も死から逃れられない運命にあることを見る者に認識させ、また生の過剰な享楽は倦怠の感覚を生むことにより、「人間の知覚システムのなかで、もっとも強烈な情動の一つ[34]」である吐き気を人間に呼び覚ますのだ。

メニングハウスは、カントが吐き気を「親密な受け入れ」である食に際しての「〈からだによい〉／〈からだによくない〉、〈健康を促進する〉／〈致命的なまでに健康に害のある〉という区別」、つまり享受不可能性についての判断に由来するものと位置づけたことを強調する[35]。カントのみならず、18 世紀美学において吐き気は「同化しえない外部のものの接近を激しく拒絶することによって、それと同時にとくに強烈な自己知覚を喚起する」こと、つまり魂が自己をいっそう強く感覚し、生命感覚を得て死を遠ざけることに寄与するものとみなされた[36]。それは、他の排除による自の確認、ないし自己の強化の作業ともいえる。このように自に帰する吐き気の効果は、メニングハウスの指摘するように、自らの実存の知覚と吐き気を同一視する 20 世紀のサルトルに至るまで文学・芸術・哲学において多かれ少なかれ連続的に継承されているわけだが、憎悪表現として「彼ら」に押しつけられる虫のイメージもまた、このような効果とともに考える必要がある。人間に吐き気を催させるおぞましく不気味な虫のイメージは、ある人間の集合を社会から排除しようとする「私たち」の目論見のために活用されてきた。おぞましい蠕虫たる「彼ら」は、「私たち」にとって有害なものとして外部に痙攣的に吐き出されることで、「私たち」の強化のために一役買うのである。異物を吐き出して再び純粋かつ純血になり、生命感覚を得た「私たち」は、弱体化や堕落の危機を脱して、もともと有していたはずの力を取り戻す —— そのような妄想が虫をめぐる比喩には取り憑いている。

虫とされるのは「彼ら」であり、「私たち」ではない —— ヘイトスピーチにおけるこの弁証法的な主体強化、つまり「私（たち）」とそれ以外を区分し、後者を排除・清算することによって「私（たち）」の同一性を獲得な

---

[33] ヴィンフリート・メニングハウス『吐き気』前掲書、31－33 頁。
[34] 同書、1 頁。
[35] 同書、211－212 頁。傍点原著者。
[36] 同書、675 頁。

いし強化するという伝統を考えると、「蛆虫」と名指されるものを手放さない『名づけえぬもの』のスリリングさが浮き彫りになる。同作の語りでは、常に「私（たち）でないもの」が「私（たち）」のなかに呼び込まれ続ける。そのとき、「私（たち）でないもの」と「私（たち）」の区分は不可能だ。両者の線引きができなくなることが意味するのは、『名づけえぬもの』においては、他なるものの排除による「私（たち）」の同一性の獲得ないし強化というプロセスが、完全に無効化されているという事態なのである。

ワームの誘い

ここでジュリア・クリステヴァによるセリーヌのパンフレについての指摘を思い出してみたい。彼女が強調したのは、セリーヌが繰り広げる妄想のなかでは、神の恩恵に預かって大きな権力を有し、かつ「不可解な快楽」を享受しているように見える全能で神秘的なユダヤ人に対して、他民族のアーリア人は恐怖のみならず、妬みや闘争心を伴った「同性愛的情熱」ないし「兄弟愛」をも抱くことになるという点である。セリーヌ的な反ユダヤ主義者は、「したがって恐怖と魅惑の対象。アブジェクシオンそのもの[37]」であるユダヤ人とのサド＝マゾ的関係を妄想することで、彼らの不可解な快楽に立ち向かおうとすると彼女は述べる。しかしその妄想のなかで気づかぬうちに自らを快楽の受け身の対象の地位にまで貶め、やはり受け身のまま腐敗するユダヤ人のイメージに自らを同一化させてしまう。

> ユダヤ人はおぞましい（アブジェクト）。つまり薄汚くて腐っている。だからユダヤ人に同一化し、ユダヤ人とのあの死を招く兄弟愛の抱擁を望む私、そのさなかで私の境界を喪失するあの抱擁を望む私も、これと同じ、糞ったれの、女性化した、受動的なアブジェクシオンに帰してしていることに気づくのだ。彼らとの兄弟愛から死の抱擁を望む私もまたこのおぞましさ、糞ったれの、女性化した、受け身の腐敗に身を落とすことになる[38]。

ある種の肉体性や汚物、食物、有機物といったおぞましい（アブジェクト）ものが人間に嫌悪感や吐き気や恐怖や拒否反応を催させることについて、胎児が母の身体と分離する際の原初的（アルカイック）棄却（ジェット）行為と結びつけて論じるクリステヴァは、未分化である子と母の身体は、父なる記号象徴秩序（ル・サンボリック）、つまり意味や論理などを産出する言語体系に参入する時にもぎ離されることではじめて主体と客体に分離する

[37] Julia Kristeva, *Pouvoirs de l'horreur. Essai sur l'abjection*, Éditions du Seuil, 1980, rééd. coll. « Points », 1983, p. 217.
[38] *Ibid.*, p. 217-218.

と考えた。逆に言えば、「私」と語る主体の出現は、それに先行する母の身体の根源的な棄却によってしか可能にならないが、アブジェクトな対象は自我をその根源的な棄却に立ち帰らせる力を有する。自我は自と他の境界線が崩れた領域に再び誘い込むアブジェクトなものを恐れつつ、同時に全く同じ理由によってそれを欲望し、恍惚のうちに自らその対象に同一化する。

クリステヴァのこのアブジェクシオンの概念を、そのまま『名づけえぬもの』に当てはめることには慎重になるべきだろう。おぞましいイメージに満ち溢れたセリーヌのテクストと、ワームという名を出すとはいえそのイメージはかなり抽象的なベケットのテクストの質の違いを無視できないからである。とはいえ、ワームの名によって喚起される蛆虫のイメージには、クリステヴァのいう、見る者を恐怖させながらも同一化を誘うアブジェクシオンの力の片鱗がみとめられないだろうか。

『名づけえぬもの』の場合、語り手の「私」は主体形成以前にありながら非在でもないという、いわば宙づり状態にある。「私」は象徴体系に引きずり込もうとする力に対する最後の対抗手段として戦略的にワームを召喚しており、当然ながらワームに対して拒絶反応を見せることはしない。ワームを排除しようとするのは「私」ではなく、象徴体系を体現する「彼ら」である。「私」は「彼ら」がワームに対し、サディスティックな懲罰を加えているところを想像する。

> ［ワーム］は苦しんでいるんだから、それを彼らは苦しむと呼ぶんだ、彼らは苦しむってことが何か知っている、苦しめる術も心得ている、教わったんだ、先生に教わった、こうしろ、ああしろ、そうすれば彼が身をよじらせるのが見られるぞ、彼が泣くのが聞けるぞ、ってね。彼は泣いている、それは事実なのさ、おっとそれほど確かではないかな、だから彼が泣いているのを利用するなら早くしなきゃ（*I*, p. 133）。

ここでは懲罰に耐えかねて悲鳴を上げるワームを、「彼ら」があたかも快楽を覚えているようにしつこく虐待する[39]。ワームを脅威とみなすからこそ「彼ら」はワームを「私」からもぎ離すことを、あるいは対馬の言葉を借りれば、殺害し忘却させることを望むといえるが、この箇所のみならず「彼ら」はワームにこだわり続けるので、まるでワームを虐めることに熱中しすぎている

[39] この引用箇所については、以下の拙論でより詳細に分析している。「〈私〉はなぜ泣くのか？　：ベケット『名づけえぬもの』における涙」『仏語仏文学研究』第 50 号、東京大学仏語仏文学研究会、2018 年、63－88 頁。

ようにも見える。ある意味では —— セリーヌが「おぞましい」ユダヤ人を呪詛しながらそれに魅了されているように —— 、「彼ら」はワームに魅了されている。「彼ら」がワームに脅威を覚える限り、ワームは「彼ら」を魅惑することができるのだ。無抵抗なワームは暴力の被害者ではあるが、その抗いがたい魅力によって「彼ら」を自らの領域のほうに呼び込む力を備えている。

とはいえ示唆的なのは、蠕虫のイメージ、あるいはワームという名前が、終盤には語りのなかから消えてしまうことである。もとより語り手の「私」はワームのことを「形のない塊（*I*, p. 117）」と語っているが、この不定形な物質が意味するのは、象徴体系からあぶれる不可視のものだ。暴力の受け手であるワームは、自と他、外部と内部といった境界を崩壊させる剥き出しの肉片のような物質性によって言語という象徴体系に抵抗し、これを危機に晒し続ける。クリステヴァの場合、おぞましいものの分析を通して問題となっていたのは言語的なものと前言語的なもののせめぎ合いであるが、ベケットの場合、おぞましいものは前言語的なものというよりも、どんなに象徴秩序に押し込めようとしてもできないもの、いわば、非言語的なものにも関わっている。結局のところワームをめぐる問題の軸は、蛆虫という記号そのものにではなく、言語と非言語の切迫したせめぎ合いと、そのなかで生じる言語への非言語的なものの危険で魅惑的な浸透にこそある。それを主題にすることは、他なるものを設定し、それを排除することによって「私」という同一性を持った言語的主体を創り上げるという原理とプロセスを明らかにすることを意味する。「私」と、他なるものの弁別 —— その様相を解き明かすことが重要であるからこそ、『名づけえぬもの』の終盤は、「私」と「彼」という人称をめぐる問いに帰着してゆくのである。

3. 蠕虫と言語

これまで、『名づけえぬもの』における蠕虫のイメージが非言語の領域をあらわすものとして機能することを論じてきた。しかし、実のところベケット作品のなかには、蠕虫のイメージがこれとは逆の役割を付与されて登場することもある。たとえば『マロウンは死ぬ』では、意外なことに虫になぞらえられるのはむしろ言語の領域のほうである。

> でも、良識が主張するところによれば、私はまだ絶え絶えに続く呼吸をすっかりやめてしまったわけではないらしい。良識はこの見方に基づいて、ありとあ

> らゆる考察を引き合いに出してくる。たとえば、私の持ち物の寄せ集めとか、私が食事や排泄をするやり方とか、向かいに住むカップルとか、空模様の変化とか、その他色々なことに関係する考察。それらはすべて、実際にはたぶん私の蛆虫（vers）にほかならないのに[40]。

マロウンはここで、自己の頭に浮かび続ける様々な考察 —— それが生じるからこそ自らはまだ死んでいないという「良識」による判断が可能になる —— のことを、「私の蛆虫にほかならない」と語る。持ち物や空間といった自らの外的状況を分析的に認識しようとする態度や、衰弱する己の身体に残された規則性を見出そうとする傾向はマロウンに絶えず見られるものだが、こうしたものに関する考察とは、彼にとって崩壊する肉体のなかで別個の存在のように活性化する思考（「この混乱のなかのどこかで思考の奴がしきりに熱中している[41]」）が生み出し続けるものである。思考が言語を通して生成されることを考えると、考察が「私の蛆虫にほかならない」と語られることは、ベケットにおいて蠕虫が言語的なものの象徴となりうることを意味している。そしてマロウンが実際に流れるように語る（記述する）のは、この思考が生み出す取り留めもない考察なのだ。

そしてベケットが若い頃から示してきた言語への敵意を思えば、彼の作品で言語に蔑称としての「蛆虫」があてがわれること自体に不思議はない。彼は有名な「1937 年のドイツ語の手紙」で、「言葉の表面の耐えがたいほど恣意的な物質性[42]」を嫌悪しつつ、言語が「その背後に隠れている事物（あるいは無）に達するために引き裂かなければならないヴェール[43]」のように思えると語った。言語へのこのような不信感ないし敵意は、その後の彼の作品に一貫して姿を現わすことになる。中期以降のベケットの散文作品は、言語を一つの異物のように捉えたうえで、言表に虚偽性が内在していることを信頼できない語りによって炙り出してきた。言語に物質性や異物性を見出し、それ自体を告発しようとする感覚はもちろんベケットに始まるものではなく、ホフマンスタールの『チャンドス卿の手紙』を筆頭に、20 世紀初頭以降の前衛文学作品に広くみられる特徴である。英仏両言語を行き来するベケット作品のなかで、言語は常にその物質性を露呈し、前期小説三部作を中心に体液

---

[40] Beckett, *Malone meurt*, *op. cit.*, p. 75.
[41] *Ibid*, p. 19.
[42] Lettre écrite en allemand à Axel Kaun, 9 juillet 1937, in *Samuel Beckett, Lettres I. 1929-1940*, trad. André Topia, Gallimard, 2014, p. 563.
[43] *Ibid*.

や埃など様々な否定的価値を持つものと結びついてきた。言語が信頼できる透明な伝達物ではなく、真実を覆い隠す不透明で虚偽的なヴェールであるならば[44]、言語を通して生成された「私」の考察も不確かで信頼できないものとして提示されるのは当然である。だからこそ「私」の考察は、「私」に取り憑く下等な異物（「私の蛆虫」）の位置に格下げされることになるのだ。

ベケットにおける言語的なものが虫と呼ばれるのは、しかしながら単に言語の価値を転覆させる効果のためだけだろうか。「私の操り人形の内側のこの白蟻のざわめきを黙らせるようなことが何か言えるか？（*I*, p. 88）」と『名づけえぬもの』で語られるとき、「私」を代理するものの中に溢れる騒音は無数の害虫が立てる音と重なる。絶えず沈黙を阻むこの騒音は、前作『マロウンは死ぬ』で「ブーンと途切れずに続くひとつの大きな音」「自然と人間と私自身の立てるざわめきがすべて混ざり合った一つの抑制のきかないちんぷんかんなお喋り[45]」として言及されていたことが示唆するように、ただの物音ではなく何よりも喋り声、つまり音声として現れる言葉という性質を持つものである。害虫である白蟻の比喩が示唆するのは、この喋り声が代理人として仮定された人格に同一性を与えるどころか、それを蝕んで内部から壊滅させてしまうという事態、しかも「私」はその声から逃れることもできないという絶望的な事態である。言語と虫のイメージの親和性は、『名づけえぬもの』の語り手が蠅に言及するときにもまた顔を覗かせる。「彼らは私に物知りであってほしいんだ、私の首が痛むことや、私が蠅に蝕まれていること、天にはそれを変えようがないって私がわかっていることを望んでいる（*I*, p. 112）」。蠅が卵を産み付ければ、そこから間もなく無数の幼虫たちが孵化するという未来がやって来る。蠅たちは増殖の連鎖を辿ってゆくだろう。「私」を蝕み、増殖してゆく蠅は、その点において以下のように同じく「私」を侵食する言葉と類似的性質を持つことになる。

> 言葉はどこにでもある、私の中にも私の外にも、何てことだ、さっきなんて、私には厚みがなかった、私にはそれが聞こえる、頭がある必要もない、彼らを止められない、自分も止められない、私は言葉の内にある、言葉でできている、他人の言葉で、どんな他人なのか、［…］言葉、私はこの言葉すべてだ、この見知らぬもののすべて、この言葉の埃のすべてだ、底がないから落ちて留まる

---

[44] 対馬は『見ちがい言いちがい』を取り上げ、ベケットがいかに言葉の運動を「ヴェール」として描き出しているかについて分析を行っている。対馬美千子「ヴェールのレトリック ―― 『見ちがい言いちがい』」、近藤耕人編『サミュエル・ベケットのヴィジョンと運動』所収、未知谷、2005 年、12－33 頁。

[45] Beckett, *Malone meurt*, *op. cit*, p. 54.

 こともなく、天もないから舞って消えることもないその埃は、互いに出会うたび、互いに別れるたびに言うんだ、そのすべてが私だと［…］（*I*, p. 167）。

埃と言い換えられる言葉は、「私」の外的存在でありながら「私」になり代わり、「私」には制御できない怒濤のごとき喋り声を生み出す。コナーが指摘するように蠅が埃から自然発生するものと考えられてきた歴史を持つことは、言葉と埃と蠅の親和性を示唆する[46]。まるで害虫や寄生虫の途方もない発生を思わせる言葉に、「私」という存在は蝕まれている。

すでに述べたように、『名づけえぬもの』では言語への組み込みの抵抗のためにワームという非言語的なものが召喚される。しかしながらベケット自身のテクストに見られる言語と蠕虫のイメージ上の結びつきは、言語記号そのもののなかに非言語的なものを見出すという着想 —— 単に言語と非言語的なものの対立があるというだけではなく、言語そのものの中に非言語的な物質性があるという着想 —— を示唆している。非言語の領域を体現するものに付けられたはずの蠕虫（*worm* / ver）という語には、そのとき *word* / vers の意味が響く。ベケットにおいて、言語の領域と非言語の領域は互いに不可侵ではなく、むしろ浸食し合い、浸透し合っている。

言語に寄生虫のような物質性を見出すこの作家の感覚に、私たちは言語をひとつの有機体とみなし、その有機体に人間は寄生されていると考える言語有機体説を想起することもできるだろう。言語学者ジョージ・ヴァン・ドリームが以下の論文でまとめるように、19 世紀初頭のドイツのインド＝ヨーロッパ語系言語学者にとって、言語をあたかも独立した生命体のように見なす、いわゆる言語有機体説は親しみ深いものだった。シュレーゲルは言語を「生きた組織 *ein lebendiges Gewebe*」と呼び、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトは「言語の有機体 *Organismus der Sprache*」と書き、シュライヒャーは言語有機体説をさらに理論化した。このような言語観は言語を恣意的で非自然的なものととらえたソシュールの登場によって後景に退くことになるが、言語を一つの生命体ととらえる考え方は現代でも一部の言語学者に継承されている[47]。彼らが言語に見出す「寄生」という性質は、蛆虫を含む寄生虫のイメージと言語を結びつけることになる。言語の自律的な増殖と際限なき寄生は、「私」に恐怖や吐き気を感じさせるのに十分だ。

---

[46] Connor, art. cit., p. 145-146.

[47] George Van Driem, “The Language Organism: Parasite or Mutualist”, in *Evidence and Counter-Evidence: Essays in Honour of Frederik Kortlandt*, vol. 2, 2008, p. 101-112. [en ligne ; DOI : 10.1163/9789401206365_009]

この議論を踏まえれば、『名づけえぬもの』における「私」は、言語という「見知らぬもの」に寄生され、かつその溢れるように増殖するおぞましき寄生虫を絶えず吐き出そうとしているかに見える。「私」とは言葉であると語る語り手は、いっぽうで言語は元来外部のもの（「他人の言葉」）であると示唆する。それはどこからともなく蛆がわくように、起源不明のまま ――「私の口から出て来るこの言葉はどこからやって来るのか（*I*, p. 140）」 ――「私」のなかに増殖している。「私」という人称はその起源不明な言葉によってはじめて生成され、声として発露するのだ。このとき暴露されるのは、「私」という主体の根源的な混淆性、非同一性である。フロランス・ゴドーは「［『名づけえぬもの』において］語る『私』は自分が頭の中にいて、自分が寄生しているのか、あるいは自分がマフードを始めとする他の分身たちによって寄生されているのかわかっていない[48]」と述べ、「私」が寄生する側でもあり、される側でもあるという二重性に注意を向けているが、これは「私」と分身たちの関係にだけでなく「私」と言語の関係にもあてはまる。言語は「私」を妨害し弱体化させると同時に、「私」を生成し存続させるものであるがために、「私」は自らに寄生する言語を恐れるだけでなく、渇望し、依存せざるをえない。ある意味、言語に寄生されつつも言語に寄生するという状況下で夥しく放出される「私」のお喋りは、「私」と「私ではないもの」の二分法が不可能となる領域を開いてゆくのである。

無力な寄生

ところで注目すべきは、「私」に寄生し、「私」を凌駕する言語は、決して強靭な力を備えた事物としては描かれないという点である。本作で言語は確かに白蟻や蠅のような有害な虫のイメージと結びつけられるが、それと同時に非力で不毛な、埃のように無価値なものとしても提示される。

> 二つの穴があって中央に私がいる、軽く塞がっているんだ。あるいはそれは一つ穴だ、入り口でも出口でもある穴には言葉が犇めき合っている、それはまるで蟻のようで、密集して、無関心で、何も運んでこないし、何も運んでいかないし、穴を掘り下げるにはあまりに弱々しい。私はもう私と言わないぞ、絶対に言わない、あまりにばかばかしいから。その代わり、それが聞こえるたびに三人称に置き換えよう、もし思いつけばね。それが彼らを楽しませるなら。何も変わらないだろうし（*I*, p. 114）。

---

[48] Florence Godeau, « Parasites et autres perturbations », dans *Samuel Beckett Today / Aujourd'hui. Présence de Samuel Beckett / Presence of Samuel Beckett*, vol. 17, édité par Sjef Houppermans, Leiden, Brill, 2006, p. 370.

言葉が無数の蟻たちの集合にたとえられる上記箇所で強調されているのは、言葉の不毛さや無能さだ。本来、社会性昆虫である蟻が各階層に応じた食料運搬や防衛などの仕事をこなしコロニーを形成するのに対し、ここにおいて言葉は何も運搬せず、穴を穿つほどの力すら持ちえないもののように提示される。しかしそれでいて蟻のようなこの言葉は無数にあり、動きを止めず、穴を塞ぐほど犇めき合っているのだ。語り手は「私」と言うばかばかしさに耐えかねたように一人称を手放そうとするが、「私」という人称を押し潰すのは言語の力強さではなく、むしろ大挙して押し寄せる言語の無能さである。「私」も「私でないもの」も確定させることができないまま、言葉は騒めく大群の虫たちの尽きせぬ流れとして口の中を通り抜けてゆくばかりとなる。

『名づけえぬもの』が蠕虫のイメージを通して問題にするのは、自と他の境界が不可能となる領域であり、またその領域に立ち帰ることによって言語の支配から脱却すること、かつ「私」という主体が形成されるプロセスを解明することである。その問題意識は、『名づけえぬもの』終盤における「私」という一人称をめぐる発話のなかに明確に表れている。代理人を立てて「彼」について語るという方法を試みてきた語り手は、終盤、「それは彼じゃない、私だ（*I*, p. 193）」と語ったうえでその言葉を以下のように覆してしまう。

> それは私じゃない、私は彼だ、結局のところはね、そうじゃないか、そう言えるじゃないか、私はそう言うべきだったんだ、これもそれも、私じゃない、私じゃない、私にはできない、こんなふうになっちゃったよ、こんなふうになっちゃうんだ、私じゃない、もしそれが彼について話せていたとしたら、もしそれが彼に起こったことだとしたら、私は彼をしっかり否認するだろうがね、もしそれが役に立つのなら、もし私の話を誰かに聞いてもらえたなら、それは私ってことになる、ここにいるのは私だ、彼について話してくれ、彼について話させてくれ、これまで頼んだことなんかないじゃないか、彼について話させてくれ、何ていうでたらめだ、もう誰もいない、これが続くかぎりはね。結果はこうだよ、そのうち一つだけが生き延びる、次に言葉が戻ってきて、誰かが、考えもなしに、私と言いやがるんだ（*I*, p. 194）。

言語が自律的にお喋りを繰り広げるようなこの語りのなかで、浮かび上がるのは一人称の語りにも三人称の語りにも失敗する声のあり様である。「私じゃない」と一人称を否定する声は、とはいえ「私」を三人称で語ることもできない。「私でないもの」を提示することができなければ「私」もまた定義することはできなくなる。自と他の峻別の機能が解体された領域において、一人称と三人称はどれだけ交互に試されても真の「私」を形成することはで

きないのだ。しかしそれでもなお言葉は回帰する。したがって、「私」の形成をめぐるせめぎ合いが終わることはない。そして声もまた上記の引用のように、「私」／「彼」について語ること、そしてその語りを誰かに聞いてもらうことを諦めずに切望し続ける。言語の「私」に対する容赦ない寄生と「私」の言語への執着は、このように機能不全に陥りながらも、まさにその機能不全によって主体の発生の原理とプロセスを批判的に解き明かすことに寄与しているのである。

むすびに変えて —— 名づけえぬ伴侶

ここまで蠕虫のイメージをめぐる言語と非言語の相互寄生的な関係を追ってきたが、最後にワームをめぐる哀れみという問題を考察し、本論を締めくくりたい。

自己の分裂が絶えず問題となるベケット作品では、必ずと言っていいほど分裂したものたちが哀れみや同情で結びつく状態が夢想される。たとえば『モロイ』の冒頭で語り手が、自分が想像する人物 A ないし B と哀れみを相互的に抱き合うことを願うのはその典型である。このような夢想が語り手や登場人物たちの間に生まれる理由は、ベケットにおいて哀れみの対象が、しばしばエロス的な欲望を喚起するものであることに求められる。ベケットが描く哀れみの希求は、愛によって相手と一体化し、分裂体の間の差異が抹消され、分裂していた「私」が統合されるという願いに通じている[49]。『名づけえぬもの』でも、「彼ら」のワームに対する哀れみを通した統合の願望が見え隠れする。

> ［…］その全てが祈りだ、彼らはワームのために祈る、ワームに祈る、彼が哀れみを抱くように、彼らへの哀れみを、ワームへの哀れみを、彼らはそれを哀れみと呼ぶ、彼らへの哀れみ、ワームへの哀れみ、我らが主よ、何に耐え忍ばなきゃならないのか、幸運なことに彼は何もわかっていない（*I*, p. 126）。

ここではワームが哀れみを抱くよう「彼ら」が祈る、と語られるが、その判然としない語りのなかで、哀れみの対象はワームでも「彼ら」自身でもあるように述べられる。ワームが自分と「彼ら」を同一視したうえでそれらを哀れむことは、ワームをめぐる「彼ら」の闘争が終わることを意味する。なぜ

[49] 論者の博士論文第 5 章では、ベケットにおける哀れみの願望が、分裂した自己の統合、つまり自己同一化の願望と不可分であることの論証を試みている。

なら前述したように、ベケットの描く世界においては、相互的な哀れみは自己ともうひとりの自己の差異を消失させ、両者を愛のうちに融合させることになるからだ。したがって哀れみによって「彼ら」と融合したワームは、「彼ら」の体現する言語・人間の領域の領域に参入することになるだろう。ワームと哀れみで結びつくことができれば、非言語的なものの粛清は完了する —— こうした目論見のもと、「彼ら」はワームが自分たちを哀れむように祈ってみせる。

しかし「彼ら」のこの祈願は決して成就しない。非人間的な存在であるワームは、何らかの感情の主体となることはなく、物語＝歴史を持たない存在である。つまりワームが哀れみの主体になることは不可能であり、また誰かがワームに感情移入することも —— ワームは人格ではなく、彼の物語も不在なのだから —— また不可能である。したがってこの哀れみの祈りをめぐっては、むしろそれが成就しないことが重要になってくるのだ。

哀れむことも、哀れまれることもできないワーム。そのようなものが取り憑いていることで、一見「私」の救済が阻まれているかのように思われるが、実のところ哀れみの対象から外れた同情不可能なワームであるからこそ、「私」の伴侶となる力を持っている。その逆説に光を当てるために、1980 年に刊行される『伴侶』を参照してみよう。この散文作品では、暗闇の中で横たわる誰か、その誰かに向かって二人称で語りかける声、その状況を三人称で語る語り手、という少なくとも三者が存在していることが示される。三者の関係は明示されないが、おそらく一つの存在が分裂した形であるのだろう。自らの孤独で過酷な状況を逃れるために登場人物をでっち上げる『マロウンは死ぬ』や、自己を他者のように語る『名づけえぬもの』の状況がここでもまたもや反復されているわけだが、この作品の新しさの一つは、「伴侶 compagnie」という概念を打ち出していることにある。

> 声と聴き手と自分自身をでっち上げる者。自分自身をでっち上げ、伴侶とする者。そこに留まること。彼は自分について語る、彼は他人のことみたいに自分について語る。彼は自分自身のことも想像して伴侶とする[50]。

想像された自分自身は、自分にとっての伴侶である。いやそれどころか、想像されたすべてのものが自分の伴侶なのだ（「すべてを伴侶とするために想像しながら[51]」）。そして何もない暗闇において、孤独な存在にとって最後

[50] Beckett, *Compagnie*, Éditions de Minuit, 1980, p. 33.
[51] *Ibid.*, p. 8.

の伴侶となるのは、どこからか去来し続ける声と言葉である。闇の中に横たわる「おまえ」は、聞こえてくる言葉の虚偽性や不毛さを感じながらも（「空虚な言葉が出るごとに、終わりの言葉にいっそう近づいてゆく[52]」）、その声と言葉に耳を傾け続ける。『名づけえぬもの』では、語り手が自らに吹き込まれる声に激しい苦痛を感じていたのに対し、『伴侶』の「おまえ」はそれを静かに求めているようだ。コナーの指摘するように語源としては「共にパンを食べること」をいう意味を持つ compagine は[53]、この作品においては寄生関係にある闘争的な相手という以上に、共生関係にある者として提示されている。

ここで注目したいのが、この小説で、死んだハリネズミと蠅という二種類の動物が「声」によって想像されることである。「それは伴侶としてどんなに役に立つことだろう[54]」と言われながら想像されるこの二つは、興味深いことに蠕虫と縁の深い動物たちだ。蠅の幼虫が蛆であることは言うまでもないが、死んだハリネズミは『伴侶』においてミミズと一緒に想像される。作品中盤、声は「おまえ」と呼ばれる者が少年時代、外で寒さに震えるハリネズミを「哀れんで[55]」拾ったときの記憶を語る。「おまえ」はハリネズミを餌のミミズたちと一緒に箱に入れ、ウサギ小屋に置いておくが、その後長らく放置してしまう。随分後になって「おまえ」がウサギ小屋で目にするのは、「あのぐちゃぐちゃのもの。あの悪臭を放つもの[56]」であり、「その時見つけたものをおまえは決して忘れない[57]」と声は語る。このように、ハリネズミは「おまえ」にとって当初は哀れみを誘うものとして登場するものの、いつの間にか哀れみを感じることが可能な段階をはるかに超えた、おぞましいものに変容しているのだ。しかしながら声が伴侶として位置づけるのは、生きた可哀そうなハリネズミではなく、哀れむことなど不可能な死んだハリネズミ —— 餌のミミズとともに悪臭を放つぐちゃぐちゃの塊となった、ハリネズミの死骸のほうなのである。

ハリネズミのエピソードが物語るのは、この作品において探求される伴侶とは、同情可能なものではないということである。同情や哀れみを通して同一化することが可能な対象ではなく、理解不可能なものの到来が存在を耐え

---

[52] *Ibid.*, p. 87.
[53] Connor, art. cit., p. 142.
[54] Beckett, *Compagnie*, *op. cit*., p. 36, 37.
[55] *Ibid.*, p. 38.
[56] *Ibid.*, p. 41.
[57] *Ibid.*

抜くよすがとなる。これは『名づけえぬもの』についても言えることだ。『名づけえぬもの』の語り手にとっても、ワームは同情可能な存在ではない。同一化のあらゆる可能性を拒絶するワームであるからこそ、ワームは「私」の主体化に利用されず、「私」の語りに他なるものとして取り憑き続けることができる。「名づけえぬもの」 —— それこそがベケットの描く、「私」の伴侶なのである。